夢のつづき〔毎月１日発行〕／第32巻第3号／通巻第326号・令和5年6月1日発行
平成4年10月2日第三種郵便物認可・年間購読料1,700円（郵便料共）

させぼ夢大学
発行●公益社団法人 させぼ夢大学
編集委員会
事務局／〒857-0863
長崎県佐世保市三浦町4-30・松蔵ビル3F
TEL.0956-25-9555 FAX.0956-25-9545
https://www.yumedai.com/
E-mail:sasebo_yumedai@yahoo.co.jp
開催ご案内 25-9556

夢のつづき

させぼ夢大学会報

No.326〈2023・6〉

令和５年度 第3回

2023年 6月15日(木)
アルカスSASEBO 大ホール

開 場 17:30
夢のひろば 18:00
講 演 18:30（終了20:00）

今回は、ノンフィクション作家として、多くの事件・事故の被害者や関係者に自ら取材し、真相を明らかにしてこられた門田隆将さんをお迎えします。

門田さんは、高知県安芸市出身。中央大学法学部をご卒業になり、新潮社に入社。「週刊新潮」編集部に配属されました。

その後、2005年度ミズノスポーツライター賞優秀賞をはじめ、2010年の文化庁芸術祭賞テレビ部門・ドラマの部大賞など、その他多くの作品で受賞されています。

中でも東日本大震災時の福島第一原発の壮絶な闘いを描いた「死の淵を見た男」が、2020年「Fukushima50」のタイトルで映画化され、日本アカデミー賞最多6部門で最優秀賞を受賞しました。

このように、門田さんは、「新潮社」入社以来、社会の出来事と真正面から向きあい、歯に衣着せぬ発言で日本の在り方に問題提起をされています。

現在、世界は、ウクライナとロシアの戦争の泥沼から抜け出せない状況にあります。一方、国内でも、安倍元首相の暗殺や岸田首相への選挙演説中の手製爆発物投入など、若者による事件が相次いでいますが、今の日本の状況をどのように読み解かれるか大変興味深い講演になりそうです。どうぞご期待ください。

講 師● 作家 門田（かどた） 隆将（りゅうしょう）氏

テーマ●時代を読み解く

次回のご案内

■と き／**7月20日（木）** 18:30～20:00
■講 師／早稲田大学教授 **中林（なかばやし） 美恵子（みえこ）氏**
■テーマ／**激変する国際情勢と日本の課題**

●埼玉県深谷市出身。大阪大学大学院卒、博士。米国ワシントン州立大学大学院留学後、日本人として初めて、アメリカの連邦議会・上院予算委員会補佐官に採用され、約10年間にわたり米国家予算編成に携わった。帰国後、経済産業研究所研究員や衆議院議員などを経て、現在、早稲田大学教授。

6月の講演会は第3木曜日です。

門田 隆将 氏のプロフィール

●高知県安芸市出身。中央大学法学部政治学科卒後、新潮社入社。週刊新潮時代は、特集班デスクとして18年間にわたって政治、経済、歴史、司法、スポーツなど、様々な分野で800本近い特集記事を執筆した。2008年に独立後、“毅然と生きた日本人”をテーマに、ノンフィクション作家として、次々と話題作を発表している。

6 2023

野村萬斎 氏

心がほっこり

西松浦郡有田町　庄村　雅子

室町時代に成立したセリフ劇、日本の古典芸能の狂言、笑いに感動しました。最近は、今の時代は戦前だと言う人もあり、不安しかありません。そんな時、狂言を観賞できて、とても幸せだと思いました。

「蚊相撲」の蚊の精の動きは、本当に蚊が出てきたみたいで、衣装もよくできていたと思います。狂言は、人間や自然・動物と共存していると言われるのが、よく理解できました。「小傘」（こがらかさ）のお経の滑稽な表現、これぞ狂言だと感心し、二つの演目とも、舞台に引き込まれました。

難しい政治、社会情勢の講演も学びの中では必要ですが、笑える講座も心がほっこり温かくなりました。檜の舞台は、繰り返し使用されるとのこと、素晴らしい取り組みだと思います。いつまでも日本の古典芸能が続いて行くことを願っています。

豊かな「間」と「時間」

佐世保市大和町　新北　博美

野村萬斎さんは、背筋がピンと伸び、低音が響く落ち着いた声の持ち主。室町時代から七百年続く伝統芸能を守る責任感を背負っていらっしゃる、貫禄に満ちたスマートで素敵な方でした。

ＳＤＧｓに、ダイバーシティ・・・自分自身で改めて考えると、日常生活でずっと実践していることが多くあります。狂言の世界でも、日本人が昔から、山川草木、八百万の神等、これらと共に存在してきて、その時代に合わせて更新するもの、合わなくても受け継いでいくものがあります。その見極めをしながら、伝統芸能として、今に繋がっていることなんだろうと思います。

最近は映像を倍速で見たり、音楽も前奏は短くなったりして、サビの部分だけを聞くという人が増えているようです。私も、時々倍速で、見たい所だけを見ることがあります。しかし、今回、大きな松が描かれているだけの三間四方の舞台の中で、動きを見て台詞を聞き、景色を想像・発展させて考えました。空間を想像しながら、街道の木々、お堂の中、法事の雰囲気が見えてくるような気がしました。その対話と所作は、七百年の時を超えた、なんて豊かな「間」「時間」なんだろうと感じました。

この豊かさをもたらしてくれる日本の伝統芸能を、これからも繋いでほしい。そう思いました。

三行感想文　夢のとびら

■年齢を感じさせず、とても若々しく、凛とした姿で登場された野村萬斎氏。往年のアイドルスターのように、とても素敵でした。700年以上の歴史のある狂言の世界。初めて生で見せていただきましたが、コミカルでおかしく、とても親しみがあり、現代劇のようにも感じました。狂言のダイバーシティやインクージョン＋SDGsなど、本当に考え方をアップデートしていかなければと思いました。とても楽しい時間をありがとうございました。

佐世保市江迎町●岩﨑　けい子

■この辺りの者でござる‼ 個人だけではなく、生きとし生けるものすべてが、この辺りの者であるということ・・・・。そうなのだと納得しきりです。今の時代、「多様性」を受け入れながら、毎日を過ごしていくことが大切になってきています。暮らし方にも幅を広げて、この辺りの者でござると過ごしていきたいものです。狂言の２つとも、楽しく見せていただきました。いいものですね。

佐世保市赤崎町●木村　典子

■中学２年の時、学校で狂言の実演があり、鑑賞したことを思い出しました。（すっかり忘れていたのです。アハハ）

あの時、お話が進むにつれ、体育館が騒がしくなったことも思い出しました。じっくり今日のように、レクチャーを受けて見ると、まさに当時のお笑いだったことが理解できました。日本人にこういうルーツがあることが、おもしろいと思いました。

佐世保市早岐２丁目●苑田　三香

■人間の不変的なありさま、多様性、700年の歴史がある狂言を初めて見ることができ、感動しました。場面が変わるのをすべてセリフで行うことなど、狂言について何も知らなかったのですが、蚊の面が「ひょっとこ」の始まりということや、蚊の表現が今も昔もあまり変化がないことに納得してしまいました。節を付ければ、本当にお経のようになる言い方や、一つ一つの内容が現代に通じるものがあると考えさせられました。

佐世保市小島町●髙増　香里

■初めて観る狂言。好きになりました。

佐世保市藤原町●森　順子

■ブラボー。あの軽やかな狐のステップの父子の舞台から10数年・・・・。日本文化を次世代にアップデートしながら、継承されている立ち姿に、安心・エネルギー・明るい未来を感じます。この辺りの者と仲良く仏となるまで・・・・夢大学も継続は力なり。

佐世保市比良町●岡井　眞紀

■待ちに待った萬斎さんに、再びお会いできて感激しています。一段と若々しくなられ、４年ぶりに狂言を楽しませてもらいました。

佐世保市春日町●有吉　成子

■野村萬斎氏のご厚意で、狂言を２演目も観ることができ、とても楽しい時間を過ごせました。ありがとうございます。

佐世保市下本山町●山口　八重子

講演を聴かれた感想をお待ちしています！

※締め切りは6月21日㈬（必着）
※宛先は、させぼ夢大学事務局まで

夢のひろば

◆日 時／6月15日㈭　午後6時～6時20分
◆演 目／女声デュオ（洋・邦ポップス）
◆出 演／ミカエル
ピアノ・ボーカル：山口美佳
ボーカル：ハーマン佳恵子

◆出演者紹介

ウェディングセレモニーの演奏者として出会った２人が意気投合し、洋楽・邦楽の名曲をオリジナルアレンジで歌うデュオ「ミカエル」を結成。市内の様々なイベントやパーティー、ライブなどに出演中。

今回は、市内各所でジャンルを問わず活躍中のセッションドラマー・佐々木久和さんと、多くのプロジャズライブで話題の店「葉港町珈琲サセボノオト」のマスターで、ベーシスト・田中博一さんをゲストに迎えます。

◆曲 目
1．ジュピター（平原綾香）
2．いのちの歌（竹内まりや）
3．ユー・レイズ・ミー・アップ
（ケルティック・ウーマン）

～この辺りの者でござる～
古典芸能にブラボー!!

「狂言」という古典芸能にふれて

長崎市小江町　岩﨑　章子

私は、野村萬斎という狂言師を知ってはいたものの、「狂言」については素人同然で、恥ずかしいことに半世紀以上も生きてきて、観たのは初めてでした。

なるほど、確かに解説を聞いて理解すると、あんなにもおもしろいエンターテイメントが、七百年も前から日本にあったのかと感じました。そして、八十を過ぎた母と参加してよかったねと、うなずきながら満足し、長崎市までの帰路につきました。

「狂言」というと、お正月の番組くらいにしか思っていなかったのですが、檜の舞台はリユースされ、実にＳＤＧｓにかなっています。

そして、物語は、今の人手不足と同じようなものを感じます。有能な人物が蚊の精とは、今ならさしずめ、ＣｈａｔＧＰＴといったところでしょうか。いつの世でも、格差社会は存在するし、有能な人を雇うのは難しいのでしょうね。実にコミカルで、おもしろい夕べでした。

おおらかな人間賛歌劇

佐世保市ハウステンボス町　松井　昭夫

能・狂言を最後に鑑賞したのは、いつ頃だったろうか？すぐに思い出せないほど、時間が経っている。今回、夢大学で狂言を取り上げてくださったことに感謝。「我々はＤＮＡを受け継ぎ、時代時代に合わせた作品作りをする。七百年間持続してきたものを、じっくり見てほしい」と語る野村萬斎さん。

第一演目は「蚊相撲」。蚊の精と人間が相撲を取るというなんともユニークなお話で、両者の動きが面白くておかしい。狂言の醍醐味である。狂言では「この辺りの者でござる」で始まるのが一般的であるというが、この作品では江州守山（ごうしゅうもりやま）の地名が出てくる。講演後、「江州守山界隈」が気になって調べたところ、かつて良質の麻の産地として知られ、大和・越前と並ぶ「蚊帳」の一大産地であった。なるほど、蚊の精の出身地はこのことが伏線にあったのか、驚きである。

次の演目は「小傘」（こがらかさ）。萬斎さんは、にわか出家の役。小傘の唄を繰り返し、所作もおかしく、お経のように節をつけ、お経のような唸り声を効かせながら唱える演技は、実に見事だ。村人たちと踊り、念仏の輪になって舞台をくるくる回り、胡散臭いお経が、だんだん気持ちよくなり、我々観客をも踊りに引きずり込む。笑いを通して人間を描くのが狂言。さすが古典芸能、「上品な笑い」はとても味わい深いものであった。

「狂言」とは何ぞや

佐世保市鹿町町　肥後屋　千鶴

「狂言」とは何ぞや、と初めは思いました。講師の野村萬斎さんは、テレビでよく見ているので、知っていました。

日本の古典芸能の一つであることも、高校の教科書で学んでいます。でも、間近で見ることは、初めての経験でした。話されている言葉も、今とは随分違いますね。ただ、何となく、仕草や表情から、わかりました。

最初は、わからないまま進んでいきましたが、後半から少しずつおもしろくなって、最後には笑っていました。そして、種あかしで、気持ちもすっきりしていました。

日本人であるのに、意外と古典芸能に接する機会が少ないと思います。私も、洋画や洋風のものが好みでした。でも、最近は、日本独自で、他にはないものが、たくさんあることに気づかされました。

学生時代、私が関西にいた時、古典や現代国語を教えてもらった先生がいました。神戸から、生徒と一緒に、松葉づえをついて電車で学校に通われていました。子どもの頃、事故で片足を失われたということでしたが、とても熱心に授業をされ、生徒にも人気がありました。先生の子どもたちに対する態度が、とても感動的だったと思います。

「一生懸命」。これは、狂言を実演してもらった野村萬斎さんも、同様だと思います。

今回の講演会は、最高に楽しくよかったです。

「この辺りの者」の精神

北松浦郡佐々町　法本　安子

令和五年度第二回目の夢大学は、「この辺りの者でござる」の萬斎氏の第一声で開講した。

大掛かりな舞台装置は使わず、言葉や仕草によって、すべてを表現する狂言。ゆえに「笑い」「おかしみ」が際立ち、面白い。

「この辺りの者」とは、時代も場所もここで私たちは共有しています、万物の存在を認め、ともにあろうという精神。今日の演目には「蚊の精」まで登場した。人以外の存在まで同列に見る、この世界に生きるということは、私たちはみんな「この辺りの者」である。

この多様性の時代、「この辺りの者」の精神は考えさせられる。老成する社会と地球で、人は他の存在を認め、どこまで優しくなれるのだろうか。

※長い間、感想文に添えて参りました講師のイラストは、都合により前号をもって終了とさせていただきます。

夢のつづき（毎月1日発行）／第32巻第3号／通巻第326号・令和5年6月1日発行
平成4年10月2日第三種郵便物認可・年間購読料1,700円（郵便料共）

ふるさと紀行

九十九島よもやま話 3

クラゲ

柴田（しばた）　昭隆（てるたか）

クラゲは六億年前に地球上に現れて以来、ほとんど形体を変えていない。淡水、汽水、浅海、海洋、深海などあらゆる環境に適応して現在まで生存してきた。世界には三千種類以上のクラゲがいるという。

日本では八世紀の書物『古事記』に出ているほどポピュラーな生物である。

国内に生息する種類は約二〇〇種類、そのうち一〇〇種類余りのクラゲが九十九島湾に生息している。

大抵のクラゲは一年以内で寿命を終えるのでクラゲを海辺で見かけるのは春から秋の間である。しかも、クラゲの多くが透明なので自然界で目視することが難しい。

クラゲは不思議な生き物で、一世代に六変化する。①成体は雄雌異体で有性生殖して卵を産む。②卵はプラヌラ幼生となって海底の岩に付着する。③ポリプに成長し、④ストロビラとなって数枚の皿の形に変化する。⑤その皿の一枚一枚がエフィラとなって海中に浮遊する。同一のストロビラから分かれた数枚の皿は無性生殖によって生まれたクローンなのだ。⑥数枚の皿が小さいクラゲ（メテフィラ）となって成体のクラゲに成長する。

クラゲは刺胞（しほう）動物門に属する動物で、イソギンチャクやサンゴの仲間である。②から④までは冬の間をイソギンチャクと同じように海底にくっついて生活する。

そんな不思議な生き物を九十九島水族館「海きらら」では、年中観賞することができる。かつては、毒針で刺す気持ち悪い生き物の印象が強かったのだが、最近は、きれい、優雅、インスタ映えするということで人気がある。半透明のミズクラゲや褐色の傘に白い水玉模様のあるタコクラゲなどは海辺でも見ることができるが、薄暗い展示室のわずかな明かりの中で浮遊するクラゲは、幻想的でいやされる存在である。

嬉しいことに、水族館の「クラゲ研究室」では、傘の直径が一センチほどに育ったクラゲを見ることができる。「クラゲ研究室」では、まだ謎の多いクラゲの生態研究をしながら、クラゲを年中展示できるように次世代のクラゲを育てている。

近年、クラゲはいやし系の生物として人気が高まっている。クラゲを海で採集し、熱帯魚と同じように家庭の水槽で飼う人もいるほどになった。佐世保では、ミズクラゲ、タコクラゲ等が海浜で採集できる。簡単に海水が手に入るなど育てる環境は整っているが飼育の水温、水流の強さ、餌やりなど、ハードルは高い。素手で扱うと刺されて、ひどい目に遭うのでご注意ください。

タコクラゲ

事務局だより

★野村萬斎さん、ありがとうございました。

萬斎さんを入れて、10人が佐世保市へ。

大勢の狂言師をお供に、私たちに「狂言」の意味や楽しさをわかってもらうため、二つの実演を見せていただきました。参観の皆様は、日本古来の伝統芸能のもつ味わいを満喫されたのではないでしょうか。

逆に、講演会のサブテーマには、ダイバーシティやインクルージョン、そしてSDGsと、現代的な言葉が並びます。

古典芸能のよさを生かしながら、新しい世界を切り拓き、それらを融合させていく向上心と行動力は、本当に敬服するところです。

これだけの舞台を組み、これだけの人数で「狂言」を佐世保市で開催できるのは、「させぼ夢大学」の特長と言えます。また、数年後には、さらに進化した「狂言」を皆様に、見ていただきたいと考えています。

★「夢のひろば」が4年ぶりに復活します！

皆様、講演会前の20分間、「夢のひろば」というステージ発表があったことを覚えていらっしゃいますか。

この「夢のひろば」は、従来、地域文化振興の場として、令和元年度まで実施していましたが、コロナ禍ゆえ2年間中止し、昨年度は動画による活動紹介を行いました。

それが、ようやく4年ぶりに6月から復活します。

令和5年度、最初の出演は、女声デュオのミカエルさん。講演会前のひと時、美しい歌声・演奏を、どうぞお楽しみください。（詳細は、内面をご覧ください。）

★館内の空調に対する備え

アルカスSASEBOの大ホール空調は、部分的な調整ができません。できる限りの対応をしていますが、フロア及び座席の位置によっては、かなりの温度差があります。したがって、十分な準備をされた上で、ご出席ください。

★学生証を忘れた場合

当日、学生証をお忘れの方には、「ご本人に限り」当日のみ有効の学生証を発行します。ただし、ご本人の確認は、申込み時に登録されている住所・氏名以外ではできませんので、よろしくお願いします。

★館内では、できるだけ不織布マスクを着用し、会話はお控えください。